

〈特集〉 太平山をめぐる歴史と文化

# 『太平山社頭惣修復縁起』

— 翻刻と解題 —

伊藤 慎 吾

太平権現別当坊連祥院は安政五年（一八五九）から同六年にかけ、社頭修復のために勧進を行った。『太平山社頭惣修復縁起』はその際に当院が板行した勧進帳である。管見では、安政五年板行の版（本学図書館所蔵）及び本誌に翻刻する同六年版（筆者蔵）がある（図1）。この他、未調査のために刊年不明であるが、

天理図書館所蔵『縁起・来由書等合綴集』第一四冊所収の一本が確認される。なおこの合綴集同冊には当山の略縁起も収録されている。当山で、近世後期、折々にこうした摺物が出されていたとすれば、今後も同種の摺物が発見されることが期待される。

〈図1〉表紙

安政五年版（右）・同六年版（左）



次に安政五年版と同六年版の書誌を簡単に記す。

【安政五年版】

書型 仮綴

たて二四・〇cm×よこ一七・〇cm

綴じ穴の幅 七・一cm

料紙 楮紙（本文・表紙共）

外題 太平山社頭惣修復縁起（打付・中央・双辺）

たて一五・五cm×よこ二・三cm

内題 太平山社頭惣修復縁起（一才）

丁数 二丁

柱刻 丁付「一」「二」

行数 一〇行

本文 漢字平仮名交じり文

刊記 なし。

印記 「國學院／蔵書記」（一才右下・朱長方印・陽刻）

所蔵者 國學院大學栃木学園図書館

【安政六年版】

書型 仮綴

たて二四・六cm×よこ一六・八cm

綴じ穴の幅 二・三cm

料紙 楮紙(本文・表紙共)

外題 太平山社頭惣修復縁起(打付・中央・双辺)

たて一五・四cm×よこ二・三cm

内題 太平山社頭惣修復縁起(一才)

丁数 三丁

行数 一〇行

本文 漢字平仮名交じり文

刊記 なし。ただし次の通り本奥書あり。

野州太平山別當

連祥院

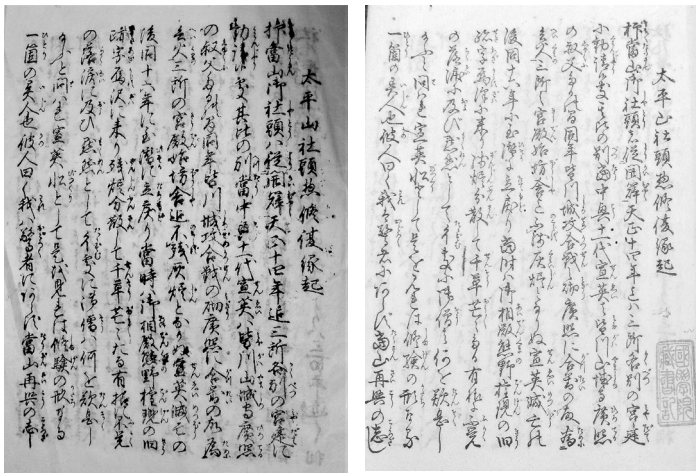
安政六<sup>丑</sup>未歲

印記 なし。

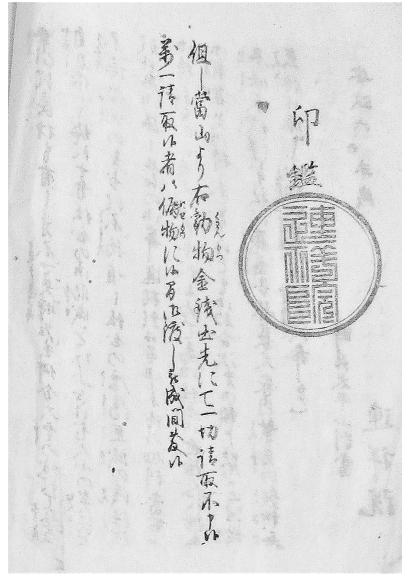
所藏者 伊藤慎吾

〔圖〕 巻首

安政五年版(右)・同六年版(左)



〈図3〉 安政六年版巻末



さて、安政五年、同六年両版を比較するに、次の三点に大きな違いがみられる。一つは同筆と判断されるが、安政六年版は改刻本である点。本文に異同は見られないものの、使用する表記に異なる仮名を使う箇所があり、また振り仮名の異同が確認される(図2)。次に外題の左側や本文末尾に加筆した注記がある点(後述)。そして安政六年版には連祥院の円印が摺られ

ている点である(図3)。なお、仮綴の綴じ穴の幅も大差がある。

ところで当山では、これに先行して文政六年(一八二二)にも大規模な修復を行っている。このことは『太平山石垣新建拜殿再建募縁起』の存在から知られる(『栃木市史』史料編・近世には「太平大権現縁起」と題して翻刻)。

本文を比較するに、『惣修復縁起』が『募縁起』を参照したようには思われない。共通する文が認められないからである。さらに、本文構成も『募縁起』は冒頭に当該社殿の縁起を置かず、勧進対象の箇所(石垣・拜殿)の実情の説明を唐突に行っている。これは伝統的な勧進帳の本文構成を踏まえたものとは言えない。起草者が何ゆえ先例を無視した本文を作成したのか解しかねる。手本となるものがあつたであろうことは『惣修復縁起』の先例に則った構成を見れば想像がつくところだからである。その意味で、本勧進帳は『募縁起』から直接影響を受けていないと考えられるのである。

ただし、翌安政六年度の改刻の際には売僧に対する注意書きが加筆されている。すなわち、外題左傍の「當

山々諸勸物請取人一切差出不申候」と本文末尾の次の但し書きである。

但し當山より右勸物金錢出先にて一切請取不申候  
萬一請取候者は偽物にせものに候間御渡し被成間敷候

『募縁起』には表紙の添え書きはないが、本文末尾に次のような一文がある。

附 近年紛敷族当山名前相偽り勸化巡行有之趣  
相聞へ候間、少々の勸物成共決而当人江は御渡被  
下間敷候

同文ではないが、同趣旨の注意を喚起した文である。これをもって直接関係があるとは言えない。しかし、安政五年に続いて六年に加筆された勸進帳がすぐさま刊行されたのは、安政五年の勸進活動に当て込んだ売僧が紛れる自体に及んだために摺り直したのだろうという見方もできる。

さて、天正一六年（一五九七）書写になる『太平大

権現鎮座記』（『新道大系 神社編 上野・下野國』所収）はオーソドックスな神社縁起で、創建の由来から始めて、慈覚大師円仁にまつわる説話などが記されている。そして、天正一二年の戦火による焼亡、同一四年の再興に関する言及はない。

これに対して寛永一二年の奥書をもつ『太平山伝記』（同書所収）はこの時の焼亡を当山の転換期としてそれ以前（天正一二年の兵火による焼失前）、その後（同一四年の再興後）を意識した記述を行っている。『伝記』で注目したいのは熊野権現に関する言説があることである。

『鎮座記』では、慈覚大師が日光権現と並んで本山における「別社」として熊野権現を建てたと一言するに過ぎない。ところが、『伝記』では「古法太平三所」として太平大権現・熊野大権現・日光大権現を挙げるとして熊野は本地が大日であり、「伊弉册尊／日輪」とも記す。「当山旧跡烏沢之事」という条によると、ここは天正中まで熊野権現の社地であり、ここで慈覚大師と対面したのだという。託宣の後、「忽ち日輪ノ影像ヲ現ジ玉フ、是ヲ以テ御神躰日輪也」とあ

り、熊野権現を日輪で表す理由が分かる。このように熊野信仰が古くから根付いていたことが知られる。天正一四年の当山再興には別当坊宣英が尽力したのであるが、『伝記』にはそのことをつづさに記すことはしていない。しかし、祭神や末社の説明を一通り終えた後に記される次の一節が注目される。

当時神社造立、天正十四丙戌ノ年也、

大檀主山城守藤原廣照

別当坊宣英

此ノ節希異ノ山伏来テ棟梁ス、恐クハ熊野権現之応化

歟ト云也、

すなわち、天正一四年の再興時、奇異の山伏がやってきた。これは熊野権現の化身であろうということである。安政度の勧進帳では、この山伏を「修験の形なるひとりの異人」として描く（一オ）。そして、意気消沈して落涙する宣英を励ますだけでなく、七日のうちに資材を調達し、百日で再興を実現させた様子を説いている。それゆえに「全く熊野権現化現の御作成る

べきよし宣英の筆記に見えへたり」という（一ウ）。

つまり、この熊野権現の靈験譚は宣英の記録した書に載っているものであり、本勧進帳の本文作成にそれを利用したことが分かる。

この勧進帳がどのように利用されたかは直接的な資料が見出されていない現段階にあつては分かりかねる。ただし、文政六年度の『募縁起』が参考になる。要点をまとめると、

1 「為<sub>二</sub>御勧発<sub>一</sub>」当山より回村の人差出候」

2 「町々村々其役元に於て御組下の衆中へ勧発被<sub>レ</sub>下」

3 「奉納金相集」

4 「奉納金別当所迄御持参被下候へは、請取書付差出申候」

まず当山から使者が各町村を回り（1）、村役から組下へ伝達（2）、さらに集金を依頼（3）、奉納金を当山別当所に持参し、請取の書付を発行する（4）という流れで勧進が行われた。勧進帳は使者が各町村を回る際に配ったものではないかと思われる。

売僧が介入するのは、奉納金を別当所に持参する前

の段階だろう。当山からの使者だと名乗って各戸を回るわけである。村役の屋敷には当山から直接注意されているだろうが、全戸に周知されるものではないだろう。売僧の具体的な活動記録が今後見出されることに期待したい。

【翻刻】

太平山社頭惣修復縁起 (外題・中央)

當山各諸勸物請取人一切差出不申候

太平山社頭惣修復縁起

抑おさ當山御社頭あたは從より二開闢かいびやく一いつ天正十四年迄あまのしんしゆ三所各別の宮建みやたてに  
勸請かんじゆ候處其比しゆの別當中興べつたうちゆう十一代宣英せんえいは皆川山城守廣照みながはまさしろうひろてる  
の叔父しゆふたるの間同年皆川城攻合戦しんせめがつかうせんみぎりの砌廣照みに合對がつたいの故ため為に  
兵火へいぐわ二三所の宮殿始きうでん坊舎迄ぼうしや不な殘ざん灰炆はいじんとなりぬ宣英滅亡せんえいめつぼうの  
後同十六年に至きうでん潛ひそに立戻たちもどり當時は御相殿熊野權現あいでんくまのこんげんの旧きう  
跡字鳥沢せきあざからまぎはに來り殘炆分散ざんじんふんさんして千草芒々せんそうぼうぼうたる有様に不覺ふかく

┌ (前表紙)

の落涙に及び黙然として、處處に御僧は何を歎息し給ふと問はれ、宣英吃として、是を見れば、修験の形なる一箇の異人也。彼人曰く、我は驚者にあらず、當山再興の志しあらば、我れ堂社の作爲に誠に妙を得たり。宣英立戻り、興致の旨を觸しらすべし。異人共々是を觸告るに、四捨二郷五里四方は元より淳和天皇御寄附の社頭殊更氏子たるの間思ひ、十方より良材運送寄捨して、僅に一七日にして材用満足し、彼異人一人晝夜匠工をなし、三所御相殿に造立一百日にして成就し、一夜の中に御神鉢、靈佛靈像不殘安置し、其假異人の行衛を不レ知、依レ之見レ之、ば全く熊野權現化現の御作可レ成よし。宣英の筆記に見へたり、即今の本社本地堂是也かゝる奇瑞の宮、社凡量を以難し、綺と雖、天正年間よりは三百年近く相成候故、自然と傾伏し、扉の開閉不宜。雖、憂之、建起し候には、家根の裏板より、初羽目板敷板、其外惣、所替候らば、では難し、持乍レ去近邊に、清淨の良木乏敷、無詮方、黙止置候然ルに、去ル辰の八月、風災に依て存外の良材を得候故、時に執の轉禍為福、誠に御本社建起の時、至候故、今般令懇願、御社頭向惣修復致し、度就、而は山上の事にて、大風雨雪の砌は、毎度神事社式にも、差支難、洪、不少、猶右等の時節には、

「一才

「一ウ



參詣の諸人難儀に及候故御本社廻りへ霧除大板家根新造致度尚又御供處も元禄已來追々に継足し根縫等

度々に相成持難く候故再建致し宮建地形の儀も殊之外

前下り故大雨長滋等の節は自然土手崩等多く候故是亦地面平均に相成候様致置候第一御本社家根是迄は柿

葺に候故八九ヶ年目には一端指茅繕候上尚十一式年目には

是非共葺替に相成其度々屋根板料立木買入にも

御案内も可レ有レ之當山は殊之外穢不淨相忌み候故所々相尋

宜敷立木有レ之候ても不淨所は難二用立二甚及難洪候依之今度

は社頭向惣修復の折柄故何卒赤銅板にて相包持方

宜敷永世不易に信心の輩を守らせ給ふ様奉レ祝候夫就

ても赤銅葺下地は式寸程の太厚板にて輔理候上を赤銅

板にて包候事にて是亦不二容易一良材無レ之ては難二出来一亦

幸ひに良材も有レ之旁不レ可レ失時乍去何分大望の儀にて難レ及二

自力一依レ之偏に十方信心の御助成をあふぎ候尤大小の貧福を

不レ論捨物の多少に不レ拘唯々信心の厚薄至誠の浅深を

願候故御銘々思召の御寄進相願候間御參詣の砌別當所<sup>江</sup>

御持來被下候共又は其所におみて為二御信心一御世話人に相立

御取集め御持參被下候とも御都合次第御頼申候然<sup>上</sup>は御姓

名帳永代御本社に籠置子孫長久家内繁昌の懇祈無二

一一〇

一一〇

怠慢<sup>まんざん</sup>一候依<sup>よ</sup>レ之心煩<sup>しんぐわん</sup>成就<sup>じゆうじゆ</sup>の御助力<sup>ごじょりき</sup>を希<sup>ねが</sup>而已<sup>のみ</sup>

野州太平山別當

安政六<sup>丑</sup>未歲

連祥院

印鑑「連祥院」(正円印)

但し當山より右勸<sup>くわん</sup>物<sup>ぶつ</sup>金銭<sup>きんせん</sup>出先<sup>しゅせん</sup>にて一切<sup>いっせつ</sup>請取<sup>じやうと</sup>不申<sup>ふしん</sup>候  
萬一<sup>ばんいつ</sup>請取<sup>じやうと</sup>候者<sup>こうしや</sup>は偽物<sup>にせもの</sup>に候間<sup>こうま</sup>御渡<sup>ごわた</sup>し被<sup>ま</sup>成<sup>な</sup>間敷<sup>まじ</sup>候

【付記】写真掲載の許可を下さった國學院大學栃木学園図書館にお礼申し上げます。